

「三〇」熟語⑩三災

企業経営漫談士 岡野実空

仏道でいう「三災」は、刀兵災・疾病災・飢饉災の「小三災」と、火災・水災・風災の「大三災」の各3つ。今回はそれらの「天災」と「人災」を、「過災」(過去)、「現災」(現在)、「未災」(未来)という時間軸の「三災」(いずれも造語)で見直し、各々に対応するマネジメントを考えます。

その1: 「過災」

「天災」は、風水害・地震・落雷など、自然現象によって引き起こされる災害。彼の寺田虎彦が名言「天災は忘れた頃にやってくる」を発したのは、いまから100年前。しかしその遙か以前から、先人たちは子孫のために災害の記録や碑を遺してきました。その労苦を忘れ、自ら体験してようやくその意義に気づくのは、「人災」に他なりません。

またいま各地の自然災害報道の枕詞に使われる、「過去に例をみない」や「何十年に一度」という標語。それは「その地では」という文言が落ちているだけで、同様の災害が毎年各地で繰り返されているのが実態。それを「他人事」としか考えず、当地の「未然」防止を怠っていたのは、やはり「人災」の一種といって過言ではありません。

因みに「人災」とは、人間の不注意や怠慢が原因となって引き起こされる事故や事件などの災害。過去から今日に至るまで、止まることのない政財界の不祥事は、その大部分が意図的である分、より質の悪い「人災」です。

その2: 「現災」

ところでいま世の中を見渡すと、元々の災害や不祥事に「二次災害」が加わり、至る所「人災」だらけ。またその当事者たちが異口同音に発する「再発防止」は、非常に耳障りです。初回ならともかく、同様の不祥事を繰り返した後のこの文言は、責任者の単なる逃げ口上。その上、その意を酌んだ第三者？委員会にその分析を丸投げ。当たり障りのない原因と対策を答申してもらい、それを上意として事後処理を済ませようという魂胆が見え見え。その真因を自ら分析ができないこと自体、責任者として不資格であることの証なのです。

またそんなトップの下では、「二次」どころか、「三次」「四次」の災害が頻発するのは必然。しかもそれは改善するどころか、ますますひどくなる一方です。どこまで続く泥濘ぞ！嗚呼！！

「三々な経営」

0-18 責任を取るとは

3-26 原因の3分類と究明

「四字熟語」で考える経営戦略

Z-02 「三々な経営」連載終了報告会の感想②

Z-05 「事業リスク」の領域

その3: 「未災」

上記のような「人災」への対応に追われる組織が恐いのは、その状態がすっかり日常化してしまうこと。その専門部署でもないのに、復元や復旧が自組織の業務の大半となり、本来果たすべき社会の変化への対応が後手に回って、それがさらなる不祥事を生むという悪循環に陥ってしまいます。

かつて都内某テレビ局の副社長が、当時あちこちで発生していた情報トラブルから、次に起きるのは自分の業界と予言。それを予防する「マネジメント」の処方箋を要望されました。そして各種の思考錯誤を経て、予防策を実施し始めて間もなく、同業他社ではほぼ想定通りのトラブルが発生。直ちに監督官庁に呼ばれ、各社に「再発」防止の対策立案の指示が。その折、氏のみがその処方箋を持参し、すでに「未然」防止対策を実施中と即答できたと報告を受けました。(銀行『大合併』の歴史的スクープで、氏が小説の主人公となったのも頷けます)

さていま究極の「三災」リストは、「SDGs」。そこから、私たちや我が国が果たすべき役割が見えます。それは自ら解決に取り組むだけでなく、覇権争いに忙しい両超大国を誘って、一緒に地球の未来を考えること。またその皮切りは、映画『猿の惑星』の鑑賞。しかしそれは、どんな形にせよ、人類が残っただけマシ？最悪のシナリオは、大多数の生物同様の「絶滅」。それはこの世から、本来の「三災」が消滅することでもあります。合掌！！

2021年7月19日 実空